

とぎれとぎれの夏 あらすじ

八十も半ばを過ぎ、独居である伯母は外出に支障を来たすようになつた。その為私は週一度、送迎の支援に通うことになる。母たち小姑からは偏屈でとつきにくいと悪評高い伯母である。支援を請け負つたものの、私に一つの記憶が甦る。四十数年前、小学生だった私は伯母による娘への激しい折檻に衝撃を受けた。また、伯母の類にはケロイドがあり、それは娘への怒りと同調して動くのだった。送迎支援が始まったが、目的が過去の苦しみの吐露であるかのようになり、伯母は迂回を要求し、その間喋り続けるのだった。

あるとき、伯母は自分の生い立ちを話し出す。私生児である自分が母親から受けた折檻、しかし伯母の中にあり続けるのはその母への思慕であつた。

伯母は捨て猫を飼っていたが、その仔猫への溺愛ぶりに、愛されなかった自分の姿と、愛しなかった娘とを重ねていた。

母親への思慕を認めその墓参りを決意した朝、伯母は餅をのどに詰まらせて死ぬ。その苦悶の表情を私は思いだし、伯母が死の間際にイメージしたものは、深い所に埋もれたまま、自分でもどうにもできなかつた娘への愛だつたのでは、と思う。

葬儀を執り行った娘は卑屈だった昔とは違い、伯母と隔絶した日々の中で自分を取り戻していた。確執を抱えたままの母と娘の別れであつたが、娘の子が寄り添う姿に私は光明を見出す。